

ステキなGlobal Harmony 衛生学教室



衛生学
教授
大槻 剛巳

ようこそ、衛生学教室へ。大学内では「応用医学」という分野に分けられている教室です。衛生学は社会医学系の一つであり「社会医学は、人々の疾病を予防し、健康を維持・増進するために、これまで大きな役割を果たしてきた。具体的には、医学をベースとして科学的なエビデンスを創出して社会に適用し、地域・職域や国レベルの集団とシステムに働きかけ、健康な生活・行動様式の推進、安全な環境の保持、医療提供システム等の構築に貢献し、人々の健康増進、疾病の予防や回復、平均寿命や健康寿命の延伸、安心と安全の保持の達成に必須の大きな役割を果たしてきた。日本国憲法25条に規定される国の責務たる「すべての生活面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努める」の実践の主演として、医師法第一条で、医師は公衆衛生の向上及び増進に寄与するものとして位置づけられているように、上記の社会医学的活動の推進には、医学の専門性に基づく医師のリーダーシップは必須である。今後も、社会医学に使命感と熱意のある医師が、社会医学領域での専門性を高めて、本領域をさらに発展させていくことが社会的に求められている。(中略)社会医学は、医学を共通基盤とし、臨床医学が病める個人へのアプローチを中心とするのに対し、実践的な個人へのアプローチを有しながらも、広範な健康レベルを有する集団や社会システムへのアプローチを中心とする特徴を有している。また医学に留まらず、科学全体やさらに経営管理等の人文系にわたる広範な学問体系を応用して理論と実践の両面から保健・医療・福祉・環境とそれらとの社会のあり方を追求する学問である。」という領域で、これは社会医学系専門医制度のWEBから引っ張ってきた(長い引用で恐縮ですが)ものです。

衛生学では、前植木絢子教授の時代から、環境中物質、なかでも繊維・粒子状物質、すなわち珪酸粒子やアスベスト繊維の生体影響について、特に免疫系への影響について研究を継続しております。こういった研究姿勢や研究成果は、学会や論文での発表もそうですが、例えば2006~2010年度科学技術振興調整費「アスベスト関連

疾患への総括的取り組み」では、大槻が代表を務め、その他2012~2016年度の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「中皮腫の発癌機構の解明と新規治療法開発(代表: 猶本良夫-川崎医科大学総合外科学教授)」に参画、加えて、2014~2016年度厚生労働省労災疾病臨床研究事業「石綿関連疾患に係る諸外国の労災補償制度及び石綿関連疾患の診断技術に関する研究」胸膜中皮腫の的確な診断方法に関する研究—鑑別診断方法と症例収集—や2016~2018年度「厚生労働省労災疾病臨床研究事業「職場における化学物質の感作性障害に対する防止措置と健康管理の有効性に関する研究」(いずれも代表: 岡山労災病院副院長・岸本卓巳先生)に参画し、繊維・粒子状物質曝露に伴う健康被害に対して、個々の人々あるいは集団としての曝露者に対して、予防や早期診断あるいは生体の免疫障害からの回復に向けた検討に取り組んでいます。

さらに、教授・大槻と准教授・西村が、2016年度学内に発足した産学連携知的財産管理室の室長・メンバーであることから産学連携活動にも積極的にアプローチし、特許申請や、産学連携活動での研究成果の社会への還元に向けて努力しています。本学もここ3年ほど参加していますBioJapanという産学連携、特にバイオや医療系のエキシビションにも、毎年、衛生学からのシーズを紹介しております。また、教室あげでの「採血によるアスベスト曝露・中皮腫発症のスクリーニングデバイスの開発」(2014/2015年出展)についても、共同研究の企業さんと、少しずつ詰めていこうという話にもなっていますし、西村准教授が担当しています「ナチュラルキラー細胞機能の非生物学的検査方法」(2016年出展)についても、いくつかの研究所・企業からの問合せもあって、こういった方面でも研究成果を社会に貢献できるシーズとする努力を続けたいと思っています。

また同様に大槻が10年来取り組んできた「住環境と健康増進」のテーマでも、成果の蓄積から、某住宅メーカーとの共同開発・商品化などにも進展し、現在は商品としての販売とともに、一層長期の居住を対象とした新